

意見陳述における緩和表現—質問の種類別にみた日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の傾向—

HEDGES IN OPINION STATEMENTS: NS AND NNS TENDENCIES BASED ON THE QUESTION TYPES

半沢千絵美, 横浜国立大学

Chiemi Hanzawa, Yokohama National University

1. はじめに

日本語学習者（以下、学習者）がどのように自身の意見を主張するのか、書き言葉である意見文は文章構造、モダリティ表現、接続詞など様々な観点から日本語母語話者（以下、母語話者）との違いや学習者の作文にあらわれる特徴が研究されている（石塚・成田 2009、伊集院・高橋 2010、清水・藤村・伊集院 2016 他）。しかしながら、話し言葉である意見陳述においては、学習者のみならず母語話者の傾向も明らかになっておらず、意見陳述の構造や表現形式にどのような特徴があるのかはわかっていない。

本研究では、母語話者と中国語を母語とする学習者に、同意するかしないか、どの程度同意するか、原因や解決方法は何かなどさまざまな質問をし、回答の中から主張を述べる際の発話を抽出して、その文末表現の言語形式を分析することで、学習者の意見陳述の特徴を探る。

2. 先行研究

学習者の意見陳述を分析した研究には Iwasaki (2009) がある。Iwasaki (2009) は、母語話者 4 名と米国の大学に在籍する中上級学習者 4 名にインタビューをし、意見を述べる際の談話構造や表現形式を分析した。その結果、母語話者が意見を述べる際には、「～と思うんですね」や「～じゃないかと思うんですけど」など終助詞や否定疑問形を伴う「思う」を用いており、それらには主張を緩和させる機能があると述べている。一方、学習者の場合は「～と思います」を用いるケースがほとんどで、主張が直接的であると考察している。Iwasaki (2009) の分析は意見を述べる際に用いられる「思う」のバリエーションを質的に分析することで学習者の意見陳述の特徴の一端を明らかにしたが、分析対象となったデータ数が少ないため、学習者の一般的な傾向を示すものではない。

書き言葉に用いられる「思う」の表現形式について分析したものには、田中 (2015) があり、田中 (2015) は母語話者と中国語および韓国語を母語とする学習者の作文コーパスからデータを集め、「思う」の活用や「思う」の直前の言語形式について分析した。その結果、母語話者は平叙文だけではなく、「たいと思う」や「のだと思う」などのようにモダリティ文も「思う」と共に用いる傾向があるのに対し、学習者の場合は平叙文との使用が高頻度であったことを報告している。特に、母語話者は「～のではないかと思う」を用いて主張の強さをやわらげる傾向があるとし、そのような表現を学習者に指導する必要性について述べている。

これらの先行研究からは、話し言葉と書き言葉いずれの場合でも、主張を述べる際に「思う」を用いることは母語話者も学習者も共通しているが、母語話者の「思う」の使用は終助詞の使用や「じゃないか」「のではないか」などの否定疑問形の挿入により主張を緩和させるのが特徴的だということが示唆される。

半沢・横山・伊東・畑佐（2016）では、33名の母語話者と13名の中国語を母語とする学習者に意見を問う質問をし、その回答を分析した。その結果、母語話者が高頻度で用いていた「～かなというふうに思います」と「～んじゃないかなと思います」の使用が学習者にはなかったことが明らかになった。しかし、調査で使用した質問文が全て「テクノロジーは私たちの生活を複雑にしたと思いますか、思いませんか」等、同意か不同意、または選択肢から回答を選ぶ質問だったため、質問の形式に影響を受けて、はっきりと意見を示すために「～と思います」または「～と思いません」で回答した可能性もあると推察した。

そこで本研究では、質問文の形式が意見陳述の文末表現に与える影響を考慮し、質問の形式を複数準備して調査を行うこととした。

3. 研究目的

本研究では「思う」の直前に挿入された終助詞「かな」や「か」、否定疑問形、「っていうふうに」など、断定的に意見を述べないようにするための表現を緩和表現とする。以下は「成功には運が必要だと思いますか、思いませんか。」という問いに対する主張の発話例である。

- (1) 運もやはり少しは必要かなと思います。(NS15-A7)
- (2) 運が必要だなっていうふうに思います。(NS4-A7)

(1) の場合は自身に問いかけをする機能を持つ終助詞「かな」を、(2) の場合は婉曲表現である「って(と)いうふうに」を挿入することで、話者の主張が断定的に聞こえないようにしている。一方、緩和表現を用いない場合の表現は以下のようになる。

- (3) 必要ないと思います。(NS8-A7)

「思う」を用いることで、述べられている事象が事実ではなく話者の意見であるということは聞き手に伝えられるが、(1) と (2) に比べると断定的な印象を与える。

本研究の目的は (1) や (2) のような意見陳述発話の文末に用いられる「緩和表現+思う」を分析することである。具体的な研究目的は以下の2つである。

1. 母語話者と中国語を母語とする学習者では、意見陳述発話の文末に用いられる「緩和表現+思う」の頻度と表現形式に違いがみられるのか。
2. 質問の形式別にみた場合、母語話者と中国語を母語とする学習者では、意見陳述発話の文末に用いられる「緩和表現+思う」の頻度に違いがみられるのか。

母語話者と学習者の意見陳述発話の文末に用いられる「緩和表現+思う」の特徴の違いを探ることで、学習者にとって習得が難しい意見陳述の表現が明らかになると考える。

4. 調査の概要

4-1. 調査参加者

意見陳述のデータを収集するために、17名の母語話者と17名の中国語を母語とする学習者に意見を問う質問をし、その回答を録音した。以下の表1は調査参加者の基本情報の概要である。本研究では学習者の日本語習熟度を把握するために、筑波大学留学生センターが開発した Simple Performance Oriented Test (SPOT) のうち、SPOT90 を利用した。SPOT の結果から、学習者の日本語レベルは中上級～上級であると判断した。

表1 調査参加者の基本情報

	母語話者 (n=17)	学習者 (n=17)
身分	学部生 (10) 大学院生 (7)	学部生 (2) 大学院生 (7) 研究生 (6) 交換留学生 (2)
SPOT 結果		66点～82点 (平均 72.8点)
日本語学習年数		1-2年 (5) 2-3年 (4) 3年以上 (8)

4-2. データ収集と分析方法

意見陳述の発話データはインタビュー形式で収集した。ただし、口頭で質問するのではなく、質問が書かれたカードを見せることで質問を提示した。調査参加者はカードを渡されたあと、質問を黙読し、語彙や質問の意味がわからない場合は調査者に質問や確認をした。そして、話す準備ができたならカードを伏せて回答し始めるという手順で進めた。回答中の発話は IC レコーダーで録音をし、録音した資料を文字化し分析を行った。調査参加者は合計 10 問の質問に回答したが、そのうち意見を求める質問は 6 問だったため、各自から得られた 6 問ずつの質問の回答が分析対象となった。

文字化された資料の中から質問に対して明らかに自身の主張を述べている発話を意見陳述発話とし、その発話の文末表現を抽出した。なお、話がそれてしまったりなど、質問に対して回答をしていない場合や、回答の意図が不明なものについては分析の対象外とした。また、1つの質問に回答する際に、回答の冒頭と終結部に2回同じ意見を提示するなど、複数回意見を述べている場合があったが、それぞれを独立した意見陳述発話として別々に分析をした。なお、本研究では、明らかに発話の終わりを示している発話を分析対象とし、発話の内容から考えると話題や談話構造の区切りが認められるという場合でも、「～て」や「～けど」などの表現で発話が続いている場合は分析の対象としていない。

4-3. 質問文

意見を問う質問をするために、A、B、C の 3 種類の質問カードを用意した。カードは 3 種類であったが、1枚のカードに異なる形式の質問が複数含まれてい

る場合があったため、5種類の質問形式に分類することが可能となった。表2は質問の形式と例を示したものである。

質問はトピックに偏りがでないよう、A、B、Cそれぞれ10問ずつ準備したが、各調査参加者にはそこから2枚ずつを選んで質問をした。

表2 質問の形式と例

カード		質問の形式	例
A	1	同意するかしないか、または選択肢から回答を選んでもらう	人はいつも本当のことを言うべきだと思いますか、思いませんか。どうしてそう思いますか。理由がわかるようにできるだけ詳しく、具体例を使って自分の意見を述べなさい。
	2	どの程度賛成するかを問う	子どもにとってテレビを見るのは時間の無駄だという意見があります。あなたはこの意見にどの程度賛成しますか。
C	3	理由や原因を問う	メディアで暴力的な場面が放送されるから、少年犯罪が増えているとよく言われます。あなたは少年犯罪が増えた原因は何だと思いますか。
	4	解決方法を問う	(3の質問の続き) また、この問題を解決するにはどうすればいいと思いますか。
	5	その他、1~4に分類されないもの(自由回答)	国際的なオンライン・コミュニケーションのいい点は何でしょうか。また、国際的なオンライン・コミュニケーションに悪い点があると思いますか。

5. 結果

分析が可能となった回答数は母語話者125で、学習者は120であった。それらの回答の中で、質問に対して明確に主張を述べている発話を意見陳述発話として抜き出したところ、母語話者の発話には209、学習者の発話には191の意見陳述発話が認められた。それらの文末表現を分析した結果を以下に述べる。

5-1. 母語話者と学習者の意見陳述発話の文末表現

表3は母語話者と学習者の意見陳述発話の文末表現を形式別にまとめたものである。

これらの結果から、母語話者の半数近く(45.9%)の意見陳述発話の文末表現には「緩和表現+思う」が用いられているのに対し、学習者の文末表現の特徴としては、緩和表現を伴わない「~と思う」の使用が半数以上(57.6%)で、また、思考動詞もモダリティ表現も用いない言い切りの形が23.6%と、母語話者の3.8%とは大きく異なっていることがわかる。

以下は観光客が増えて、歴史的な建物や場所に被害が出ていることについて、どのように問題解決をすればいいかを問う質問に対して学習者(NNS15)が言い切りの形で回答している例である。

表3 母語話者と学習者の意見陳述発話の文末表現形式

	母語話者	学習者
思考動詞		
～と思う (例「～べきではないと思います」)	76 (36.4%)	110 (57.6%)
緩和表現+思う	96 (45.9%)	13 (6.8%)
指示語+思う (例「～というか、そう思います」)	3 (1.4%)	2 (1.0%)
～と考える	1 (0.5%)	0 (0.0%)
賛成・反対 (例「45%賛成です」「反対です」)	14 (6.7%)	8 (4.2%)
言い切り (例「～が重要です」「～ではありません」)	8 (3.8%)	45 (23.6%)
モダリティ表現 (例「～かもしれません」「～んです」)	10 (4.8%)	13 (6.8%)
その他	1 (0.5%)	0 (0.0%)
計	209	191

- (4) 第一は、観光地の毎日の観光客を限定する必要があります。そして、毎月、例えば毎週土曜日とか日曜日とかその日にしゅうかん、しゅうかんして、観光地を修理する必要があります。(NNS15-C8)

どうすれば問題解決できるか意見を求めている質問に、「必要があります」と断言する形で意見を述べているのがわかる。一方、母語話者に同じ質問をした場合の回答例としては以下がある。

- (5) そういうのを見張る人みたいなのをつけて、そういうのをした人にはもう、罰金っていうか、そういうのを、なんて言いますか、その条例とかで規制するべきかなというふうに思います。(NS4-C8)

母語話者の意見陳述発話の文末表現にも、思考動詞もモダリティ表現も使わず断定的に意見を述べている発話はみられたが、学習者に比べて頻度が少ないことから、そのような文末表現形式は学習者の意見陳述発話の特徴であると考えられる。

また、母語話者と学習者が用いていたモダリティ表現は、「～んです」(8例)、「～かもしれない」(5例)、「～かな」(4例)が主なものであったが、母語話者と学習者に特徴的な傾向は認められなかった。

5-2. 母語話者と学習者の意見陳述発話に用いられる「緩和表現+思う」の表現形式

例(1)(2)および(5)で示された緩和表現以外にも、母語話者はさまざまな表現を用いていたことが明らかになった。次頁の表4は母語話者の意見陳述発話の文末表現に用いられた「緩和表現+思う」の表現別の出現頻度を示したものである。

表4 母語話者の「緩和表現+思う」の出現頻度

緩和表現+思う	出現頻度
～かなと（って）思う	46
～んじゃないかなと（って）思う	18
～のかなと思う	8
～かなっていうふうに思う	8
～んじゃないかと思う	6
～など（って）思う	4
～っていうふうに思う	2
～のかなってふうに思う	1
～なってふうに思う	1
～わけではないと思う	1
～のではないかと思う	1

出現頻度が2回以上のものには、同一人物が複数回使用したものもあるため、比較の際には注意しなければならないが、「～かなと（って）思う」や「～んじゃないかなと（って）思う」については、出現頻度が高く、母語話者がよく使う傾向にあると言える。表5は学習者の結果を示したものである。

表5 学習者の「緩和表現+思う」の出現頻度

緩和表現+思う	出現頻度
～ではないかなと思う	3
～ではないかと思う	3
～かなと（って）思う	3
～などと思う	1
～かもしれないと思う	1
～のかなと思う	1
～のではないかなと思う	1

ここで注目したいのは、母語話者の発話には「～んじゃないかと思う」「～んじゃないかなと（って）思う」など「～んじゃないか/かな」が使われており、特に「～んじゃないかなと（って）思う」は頻度が高い。しかし、学習者の「緩和表現+思う」に認められた類似表現は「～のではないかなと思う」1件である。

さらには、母語話者が用いていた「と（って）いうふうに」という表現は学習者の発話には確認できなかった。

5-3. 質問の形式別にみた「緩和表現+思う」

以下の表6と表7は、母語話者および学習者の「緩和表現+思う」の出現頻度が質問の形式によって異なるかを分析した結果を示したものである。表中の数字1～5は表2の数字に対応している。

母語話者の質問形式別の意見陳述発話の文末表現からわかるのは、質問形式の違いに関わらず、「緩和表現+思う」が30%以上の割合で用いられているという点である。その中でも、「緩和表現+思う」の頻度が顕著に高いのが、4の解

表6 母語話者の質問形式別の意見陳述発話の文末表現形式

		1	2	3	4	5
思考動詞	～と思う	38 (59.4%)	15 (23.8%)	10 (40.0%)	5 (14.7%)	8 (34.8%)
	緩和表現+思う	22 (34.4%)	26 (41.3%)	9 (36.0%)	28 (82.4%)	11 (47.8%)
	指示語+思う	1 (1.6%)	1 (1.6%)	1 (4.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	～と考える	1 (1.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
賛成・反対		0 (0.0%)	14 (22.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
言い切り		1 (1.6%)	3 (4.8%)	1 (4.0%)	0 (0.0%)	3 (13.0%)
モダリティ表現		1 (1.6%)	3 (4.8%)	4 (16.0%)	1 (2.9%)	1 (4.3%)
その他		0 (0.0%)	1 (1.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
計		64	63	25	34	23

表7 学習者の質問形式別の意見陳述発話の文末表現形式

		1	2	3	4	5
思考動詞	～と思う	36 (72.0%)	33 (67.3%)	8 (29.6%)	21 (51.2%)	12 (50.0%)
	緩和表現+思う	3 (6.0%)	3 (6.1%)	0 (0.0%)	4 (9.8%)	3 (12.5%)
	指示語+思う	1 (2.0%)	0 (0.0%)	1 (3.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	～と考える	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
賛成・反対		1 (2.0%)	7 (14.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
言い切り		8 (16.0%)	5 (10.2%)	13 (48.1%)	11 (26.8%)	8 (33.3%)
モダリティ表現		1 (2.0%)	1 (2.0%)	5 (18.5%)	5 (12.2%)	1 (4.2%)
その他		0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
計		50	49	27	41	24

決方法を問う質問に対する回答にあらわれたもので、82.4%の文末表現が「緩和表現+思う」であった。一方、「緩和表現+思う」の使用が最も少なかったのは1の同意するかしらないか、または選択肢の中から回答を選ぶ質問に回答する際に用いられた「緩和表現+思う」で、その場合は緩和表現を伴わない「と思う」を最も多く使っていたことがわかる。また、2の「その意見にどの程度賛成しますか」という質問に対しては「賛成します」や「あまり賛成しません」「100%反対します」など「賛成・反対」で回答することが多いこともデータから明らかになった。

一方、学習者の場合は、3の理由や原因を問う質問に対する回答には言い切りの表現が最も多く使われていたが、それ以外の質問形式では緩和表現を伴わない「と思う」の頻度が一番高いという結果となった。いずれの質問形式でも50%以上の意見陳述発話が「と思う」で終わっているが、母語話者同様、特に同意するかしないか、または選択肢の中から回答を選ぶ質問に回答する際に用いられたものが最も多かった。

6. 考察

意見陳述発話の文末表現に用いられる「緩和表現+思う」の出現頻度の結果は、Iwasaki (2009) がインタビューデータを質的に分析して得られた考察を支持する結果となった。本研究に参加した学習者の日本語習熟度は中上級から上級であり、中には日本人学生と同じ授業を受講している学生や、日本滞在が4年以上という学生もいた。そのような学習者でも、主張を述べる際の発話は緩和表現を伴わない「～と思う」の使用が多く、さらには「～と思う」もモダリティ表現も使わずに、言い切りの形で発話を終えるという場合も20%以上と少なくなかった。一方、母語話者が同じ質問文に対して意見を述べる際には8割以上に「思う」を使っており、さらにはその半数以上が「緩和表現+思う」であったことを考えると、母語話者は意見陳述の際に断定的な表現を避ける傾向にあると言える。

本研究で抽出した「緩和表現+思う」の緩和表現の部分が実際に断定的に意見を述べることを避ける機能を示しているかは、質問の形式別の結果からも示唆された。質問の形式別に「緩和表現+思う」の出現頻度を分析したところ、同意するかしないか、または選択肢の中から回答を選ぶ質問に回答する際には、緩和表現を伴わない「～と思う」が文末に用いられる頻度が最も高かったが、解決方法を問う質問の回答には「緩和表現+思う」が高頻度であらわれた。以下は「小学生や中学生は携帯電話やスマホを学校に持って行くべきではないと思いますか、思いませんか」という質問に対する回答の冒頭部分である。

- (6) 私は小学生や中学生が学校にスマートフォンを持って行くべきではないと思います。(NS1-A2)

質問文の文末が「～と思いますか、思いませんか」であるため、その回答に「～と思います」を使うのは自然な流れであると考えられるが、この場合は「思う」か「思わない」かのどちらかを選択することが適切な回答であることから、あえて主張をやわらげる必要がないという意識が働いた可能性がある。

一方、解決方法を問う質問の回答に高頻度で「緩和表現+思う」が用いられていたのは、ある問題についての解決方法を述べる際に、それが唯一の方法である、または、それが最も有効な方法であるということを断言することを控え、自分の主張が間違っている可能性もある、他にも方法はあるかもしれないという含みを残しておきたいという意識のあらわれではないかと考えられる。それは、疑問を示す終助詞「かな」や否定疑問形、「というふうに」といった婉曲表現が緩和表現として用いられていることから示唆される。

解決方法を問う質問は「人に芸術に興味をもってもらうためにはどうすればいいか」「裕福な国はより裕福に、貧しい国はより貧しくなる問題の解決方法」「少年犯罪はどう解決できるか」「子供の肥満の問題の解決方法」「観光客が増えて歴史的建造物が被害を受けている問題を解決する方法」などで、おそらく母語話者にとっても学習者にとっても、普段から意識的に解決方法を考えたり、他者と意見交換をしている問題ではなかったと思われる。そのような問題について意見を求められ、即座に回答しなければならないという時に、母語話者が「一つの解決方法として」自身の提案を緩和表現を用いて述べていることは発話の機能としても妥当である。

では、同じ状況で緩和表現の伴わない「～と思う」や言い切りの表現を用いる場合、聞き手にはどのような印象を与えるのだろうか。母語話者が用いている緩和表現の機能の逆を考えると、「これが唯一の解決方法である」「自分の意見は必ず正しい」「他の主張を認めない」といった印象を与える可能性が考えられる。

以下は、人々に芸術に興味を持ってもらうためにはどうすればいいかという問いに対する学習者の主張が述べられている発話である。

- (7) どうして、人に芸術に対して、関心を持たせるのかについて、やはり、マクス、いやあるとても有名な、経済、心理学者のひぎょうしゃの話で言うと、人が自分の、何か安全とか生理とか、そういった欲求を満たしてから、精神的な欲求に考えるようになります。芸術が精神的なものです。でも、言い換えると、どうやって、人に関心を持たせるのかっていうのは、まず、人の、生理的な欲求を満たすことです。(NNS1-C1)

この学習者は自分が知っている理論を説明した上で、生理的な欲求を満たすことが人々に芸術に興味を持ってもらう方法であると述べている。この意見自体は間違っていないかもしれないが、それは万人に有効である方法だと断言できるのか、他の方法については考慮していないのでは、という疑問を抱かせる可能性があると言える。また、はっきりと言い切ることで、その話題について熟知している第一人者の発言のように聞こえてしまうのではないだろうか。しかし、聞き手が実際にそのような印象を持つかどうかはさらなる調査が必要である。

今回の調査で明らかになった母語話者の意見陳述発話の文末表現形式は、「というふうに」を除いては初中級レベルの文法項目である。しかし、学習者はそれらの文法項目を「思う」と組み合わせて使うことによって、直接的、または断定的に自分の意見を述べることを避ける機能があるという知識がないのかもしれないし、またそのように意見を緩和させるという言語行為が日本語の談話にはよくあらわれるということを理解していない可能性がある。

教授法への示唆としては、学習者の理解を促進するために日本語の授業で母語話者の緩和表現を取り上げて教材として扱うことが可能性としてあげられる。意見陳述の際の表現形式を紹介するだけでなく、母語話者がなぜそのような表現を使っているのか、それは自分の母語とどのような違いがあるのかということ議論することで、学習者の理解が進むはずである。特に上級レベルの学生のため

には、自己の発話をモニターさせるという意味でも有効な活動になるのではないだろうか。

7. まとめと今後の課題

以上、本研究のデータから得られた結果をまとめると、意見陳述発話の文末に用いられる「緩和表現+思う」は出現頻度、表現形式、そして質問形式別の頻度のいずれも母語話者と学習者に傾向の違いが認められることがわかった。

今後は傾向の違いだけではなく、その違いに影響している要素や、学習者の意見陳述に「緩和表現+思う」が欠如していることが与える影響についても分析したいと考える。そのためには、学習者の母語の言語構造や、母語で意見を述べる際の表現形式の選択についても分析する必要がある。

本研究は平成 29-31 年度科学研究費助成事業（17K02847）の助成を受けたものである。

参考文献

- 石塚ゆかり・成田育男（2009）「意見文における意見表明と反論提示—日中韓大學生の日本語作文を分析して—」『日本語教育方法研究会誌』16, 2, 38-39 日本語教育方法研究会
- 伊集院郁子・高橋圭子（2010）「日本語の意見文に用いられる文末モダリティー—日本・中国・韓国語母語話者の比較—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36, 13-27 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 清水由貴子・藤村知子・伊集院郁子（2016）「学習者の意見文に見られる「しかし」の分析—JLC1 年コース作文データベース—を用いて—」東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』42, 41-56 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 田中舞（2015）「ICLEAJ 作文コーパス β 版における日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者による「思う」の使用状況について」『同志社大学日本語・日本文化研究』12, 133-147 同志社大学日本語・日本文化研究センター
- 半沢千絵美・横山千聖・伊東克洋・畑佐由紀子（2016）「日本語母語話者と中国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の談話構成と文末表現形式」『第 27 回第二言語習得研究会予稿集』59-64
- Iwasaki, Noriko. (2009). Stating and supporting opinions in an interview: L1 and L2 Japanese speakers. *Foreign Language Annals*, 42(3), 541-556.